

境田C・D遺跡

発掘調査報告書

1986

東北電力株式会社山形支店
山形県教育委員会

さかい だ
境田C・D遺跡
発掘調査報告書

昭和61年3月
東北電力株式会社山形支店
山形県教育委員会

序

本報告書は山形県教育委員会が昭和60年度に実施した東北電力株式会社の送電線鉄塔移設に伴う「境田C・D遺跡」の発掘調査の記録をまとめたものであります。

境田遺跡群のある山形市西北部は県下でも有数の穀倉地帯であり、反収の多い実り豊かな地域であります。そして、この地域は県内でも最も早く稻作文化が定着した地域で、その後も着実な発展を続けて現在に至っていることを、多くの遺跡の存在によって窺い知ることができます。今回、調査を行った境田C・D遺跡は東北横断自動車道仙台一寒河江線の建設に伴って、昭和56・57年の二ヶ年にわたって発掘調査が行なわれ、縄文時代、弥生時代、平安時代の三時代の遺跡が重複する貴重な遺跡であることが明らかになりましたが、今回の発掘調査によって、新たな事実も判明いたしました。

埋蔵文化財をはじめとする文化遺産は私たちの祖先の歴史を語る資料としてかけがえのない財産であります。長い年月にわたって地中に埋もれ続けてきた貴重な遺産を保護し、未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの重要な責務であると考えます。

このような観点から、最近増加の傾向にある諸開発事業と埋蔵文化財の調整をはかり、今後共、その保護と活用のために努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、調査にご協力いただいた東北電力株式会社山形支店をはじめとする関係各位に感謝申し上げると共に、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護・普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和61年3月

山形県教育委員会

教育長 高橋 和雄

例　　言

1 本書は東北電力株式会社山形支店の委託を受け、山形県教育委員会が昭和60年度に実施した東北電力送電線鉄塔移設に係る「境田C・D遺跡」の発掘調査報告書である。発掘調査は昭和60年12月3日から同月11日まで延7日間実施した。

2 調査にあたっては東北電力株式会社山形支店、日本道路公団仙台建設局山形工事事務所、見崎地区から御協力を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

3 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治〔山形県教育庁文化課埋蔵文化財主査〕
佐藤 庄一〔山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長〕

現場主任 渋谷 孝雄〔山形県教育庁文化課技師〕

調査員 野尻 侃〔山形県教育庁文化課技師〕

事務局 事務局長 小関 陽三〔山形県教育庁文化課長〕

事務局長補佐 加藤 友信〔山形県教育庁文化課長補佐〕

事務局員 斎藤世都子〔山形県教育庁文化課主事〕

中嶌 寛〔山形県教育庁文化課主事〕

氏家 修一〔山形県教育庁文化課主事〕

4 挿図縮尺は不統一であり、それぞれにスケールを入れて示した。図版の遺物は3分の2とした。本文・挿図中の記号はSB—掘立柱建物跡、EB—堀り方、SP—ピット、SD—溝跡を表わす。なお、方位は真北とした。

5 本報告書は渋谷孝雄が担当・執筆し、図版作成にあたっては佐藤めぐみの補助を得た。

6 本書の編集は長橋至、渋谷孝雄が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

目 次

I 調査に至る経過.....	1
II 遺跡の立地と環境	
1 立 地.....	1
2 周辺の遺跡.....	2
III 調査の経過.....	4
IV C遺跡の調査.....	7
V D遺跡の調査	
1 調査区の概要.....	8
2 層 序.....	8
3 発見された遺構.....	9
4 出土した遺物.....	11
VI まとめ.....	12

挿図目次

第1図 遺跡位置図.....	3
第2図 調査区位置図.....	5
第3図 C遺跡北壁層位断面図.....	7
第4図 D遺跡東壁層位断面図.....	8
第5図 D遺跡発見遺構平面・断面図.....	10
第6図 D遺跡出土土器実測図.....	11

図版目次

図版 1 C遺跡調査区近影, C遺跡調査風景	
図版 2 C遺跡北壁層位断面, C遺跡調査区全景	
図版 3 D遺跡調査区近景, D遺跡東壁層位断面	
図版 4 D遺跡遺構確認状況, D遺跡調査区全景	
図版 5 S B 1掘り方	
図版 6 出土土器	

I 調査に至る経過

山形市の北部にある長町、見崎の集落に狭まれた地域にある境田遺跡群は、昭和60年までに6遺跡が登録されている。これらの遺跡の多くは昭和50・51年に山形県教育委員会が実施した東北横断自動車道仙台一寒河江線建設に係わる分布調査で発見されたものである。

これらの遺跡のうち自動車道路線敷にかかる境田C遺跡は昭和56年度に、また、境田C'・D遺跡については昭和57年度に日本道路公団から委託を受けて、山形県教育委員会が発掘調査を実施し、その報告書も刊行されている（渋谷1982, 84）。

調査の結果、次のような成果が得られた。

- ① 境田遺跡群は馬見ヶ崎川や高瀬川によって形成された自然堤防上に立地する縄文時代から平安時代に至る複合遺跡であること。
- ② 平安時代では3ヶ所の遺構・遺物の集中箇所が発見され、それぞれから出土した土器の違いから、小規模な掘立柱建物で構成される集落となるC遺跡B地区→大溝の発見されたD遺跡→竪穴状遺構が検出されたC'遺跡、C遺跡A地区へと推移したものであるとの予測が得られた。そして、その年代は9世紀中葉から10世紀末葉に至ると考えられること。
- ③ 遺跡から弥生時代中期末の二本同時施文の文様をもつ土器が出土し、壺棺墓も発見された。弥生土器のなかには粉痕の残るものがあり、また、石庖丁も出土し、弥生時代中期に、この地に稻作が定着していることが明らかとなったこと。
- ④ C'遺跡では縄文時代晩期大洞B式の土器が、C遺跡では大洞C₂式土器が、D遺跡からは大洞A・A'式の土器が、それぞれ平安時代の遺構の地山から出土したことにより、縄文時代晩期から馬見ヶ崎扇状地前縁部が人類活動の主要な舞台のひとつになっていたことが明らかとなったこと。

このたび、自動車道建設に伴い、東北電力送電線の鉄塔が移設されることになり協議の結果、このうちの2基については遺跡内に建設せざるを得ないことから、記録で遺跡を保存することで、昭和60年12月に急速緊急発掘調査が行なわれることになった。

II 遺跡の立地と環境

1 立 地 (第1図)

境田遺跡群は山形市街の北方約4km、国鉄奥羽本線羽前千歳駅の北東約1.7kmに位置し、標高は100～102mをはかる。現在の地目は水田と畑地で、畑地は水田面よりやや高くなっているが、現在の畑地の一部は近年の耕地整理による人工的な微高地もあり、人為的な地

形の改変も少なくはないと考えられる。しかし、これまでの発掘調査の所見によれば、造構が分布する場所は、地山の絶対高が高いことが明らかとなっており、沖積平野に帶状に分布する自然堤防上に立地していたとみることができよう。

2 周辺の遺跡（第1図）

本遺跡群を含む一帯には縄文時代から平安時代までの多くの遺跡があり、第1図の図幅のなかでは、現在34ヶ所の遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡は現在までのところ境田C, C', Dの発掘調査を行った遺跡だけである。いずれも晩期であるが前葉の大洞B C式、中葉のC₂式、後葉のA・A'式の各型式の土器が出土している。遺物の出土量から見て、これらが拠点的な集落であることは考えにくいか、縄文晩期人が沖積平野に積極的に進出していったことを示すものと言える。

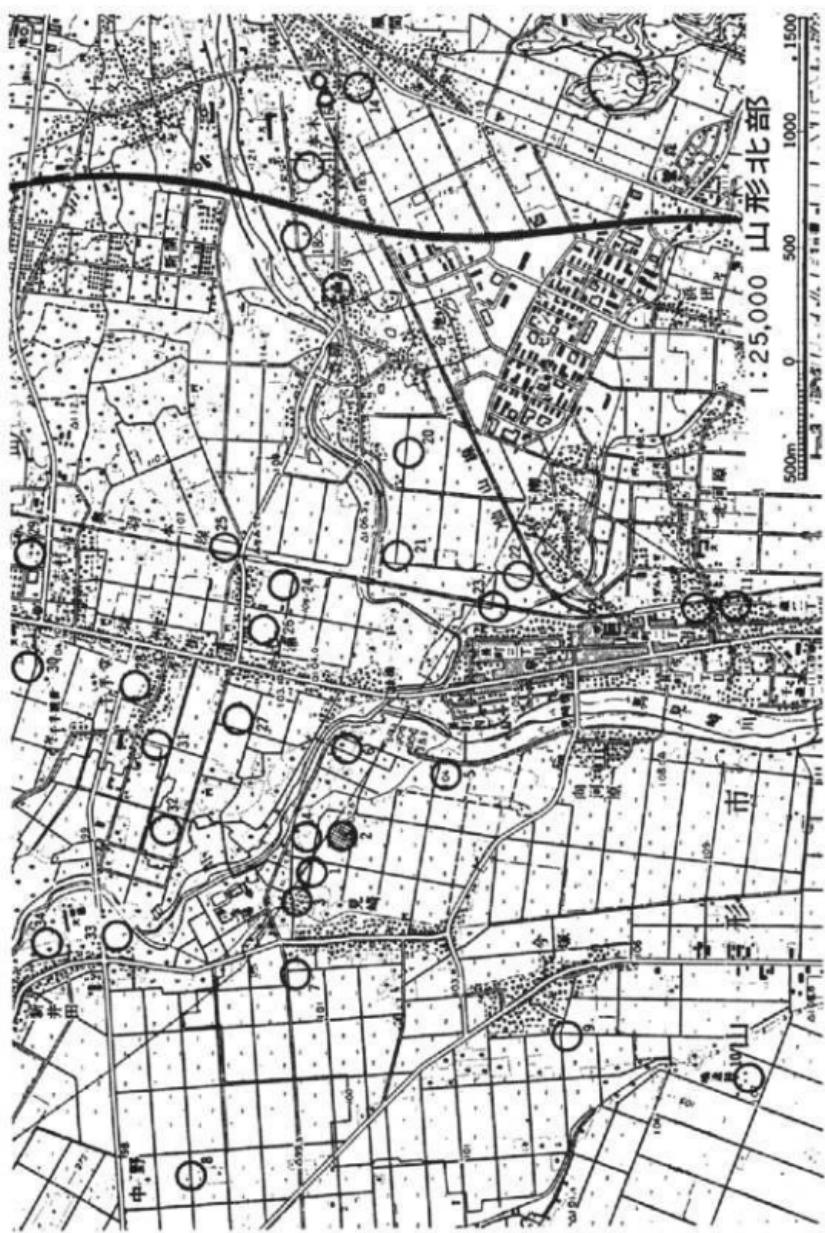
稻作が主要な生産活動となった弥生時代に入ると、安定した自然堤防上と、湧水地となる扇端部に多くの遺跡が営まれるようになりこの地域の遺跡密集度は県下最大である。その多くは二本同時施文で各種の沈線文を描く弥生時代中期末のもので、七浦遺跡(27)や今塚遺跡(9)では石庖丁も出土している。また、南河原遺跡(31)では壺棺墓が検出され、お花山(13)からは墓壙の可能性のある土壙が検出されている。

古墳時代の集落は国指定史跡の鳴遺跡(10)が著名である。6～7世紀代の集落で打込み式の柱をもつ住居跡3棟、倉庫跡3棟が検出され、木製の生産用具や生活用品などが多数発見されている。昭和57・58年に調査が行なわれたお花山古墳群(13)は鳴遺跡とほぼ同じ時期の古墳群である。発掘区内だけで24基の古墳、棺が検出され、鏡をはじめ豊富な副葬品が出土している。

古墳時代に続く奈良時代の遺跡は、なお不明ながら、平安時代に入ると沖積平野の自然堤防上に立地する遺跡が多くなる。特に白川左岸や上流部の高瀬川左岸には、この時期の遺跡が鉛なりに分布する様子が窺える。後背湿地を利用した水田經營が一段と安定したことを物語っている。

No.	遺跡名	立地	時期	No.	遺跡名	立地	時期	No.	遺跡名	立地	時期	
1	境田 C	自然堤防	縄文～平安	10	菊	自然堤防	古墳～奈良	19	青柳	平地	平安	
2	境田 D	自然堤防	縄文～平安	11	此町	自然堤防	古墳	20	下柳 A	自然堤防	古墳	
3	境田 C	自然堤防	縄文～平安	12	長町北河原	自然堤防	古墳	21	下柳 C	自然堤防	平安	
4	境田 B	自然堤防	平安	13	お花山古墳群	独立丘陵	古墳	22	西の神	自然堤防	古墳	
5	境田 A	自然堤防	平安	14	寺	西	自然堤防	平安	23	自山堂	自然堤防	古墳
6	境田 E	自然堤防	平安	15	風間 A 古墳	風間	古墳	24	七瀬一の坪	自然堤防	古墳	
7	見崎	自然堤防	平安	16	風間 A 古墳	風間	古墳	25	大明神	自然堤防	古墳	
8	服部	自然堤防	平安	17	一本木 A	自然堤防	古墳	26	五反	自然堤防	古墳	
9	今堀	自然堤防	古墳	18	一本木 B	自然堤防	古墳	27	七	自然堤防	古墳	

第1図 遺跡位置図



III 調査の経過

発掘調査は鉄塔建設敷地内を対象として、昭和60年12月3日から11日まで延7日間実施した。対象面積はC遺跡が51m²、D遺跡が67m²である。以下に調査の経過を述べる。

12月3日(火) 天候 くもり

午前中に器材を搬入し事務所内の整理を行う。午後からC遺跡の調査に入る。対象区に3メートルグリッドを設定し第II層上部まで掘り下げる。遺物はII層上面から赤焼土器の破片が数片出土しただけである。

12月4日(水) 天候 はれのちくもり

昨日に引き続きC遺跡II層下部から掘り下げるII層下部、III層とも遺物は1点も出土せず。IV層上面で面精査を行ったが、土色変化はない。このため、調査区北部の1グリッド列をダメ押しの意味でV層上面まで掘り下げるが遺構は確認できなかった。層位断面図作成後、D遺跡に移りグリッド設定を行う。グリッドの大きさと呼称はC遺跡と同じ。

12月5日(木) 天候 はれときどきくもり

D遺跡の表土剥ぎは午前中で終了。午後から水田床土をジョレンで剥ぎとり面精査を行う。その結果、調査区内で3基の掘り方を確認し、確認状況の写真撮影を行う。

12月6日(金) 天候 くもりときどきはれ

D遺跡の遺構精査を行う。この他、建物の規模を把握するため、一部地区外となる2ヶ所に試掘溝を設定し、両者から掘り方を検出する。平安遺構の完掘状況と、2ヶ所の掘り方の上場確認の写真撮影を行う。

12月9日(月) 天候 くもりときどきゆき

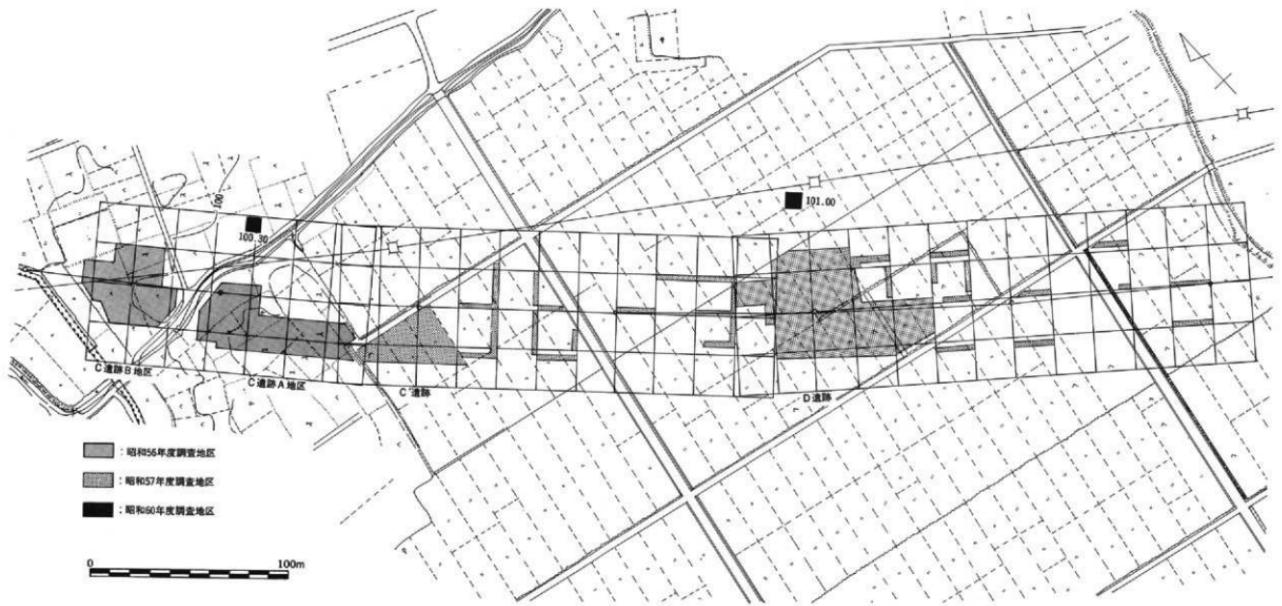
D遺跡で検出された平安時代の遺構の平面実測、レベリングを行った後、掘り方3基の断ち割りを行い、これらの断面撮影、実測を行い、平安時代の遺構の調査を終了する。その後、縄文時代の遺構、遺物の有無を確認するため、X-2・3列を平安時代の地山であるII層と、その下位のIII・IV層を掘り下げるが、遺構・遺物とも検出できなかった。

12月10日(火) 天候 ゆき

3-1区をさらにVI層下部まで掘り下げるが、遺構、遺物は確認できなかつたため、今回の調査区には縄文時代の遺構、遺物は存在しないと判断し、層位断面図の作成に入る。午後から埋戻しに入り約半分終了。

12月11日(水) 天候 くもりときどきはれ

D遺跡の埋戻し作業を行い、昼前に終了。器材の洗浄、梱包の後、器材を搬出して現場を撤収する。



第2図 調査区位置図

IV C 遺跡の調査

今回の調査区は、前回の調査でC地区と呼んだ場所で、坪掘りで遺物は散漫に出土するものの、遺構の存在する可能性は少ないとして、拡張調査を行わなかった地区に隣接する(渋谷1982)。地目は蔬菜畑である。

調査の結果、当初の予想どおり、II層から赤焼土器の高台付壺の底部破片が2点、壺もしくは高台付壺の体部破片が2点出土しただけで、遺構は検出できなかった。

今回の調査区の層序は以下に示すとおりである。

第I層：茶褐色シルト（畑の耕作土）

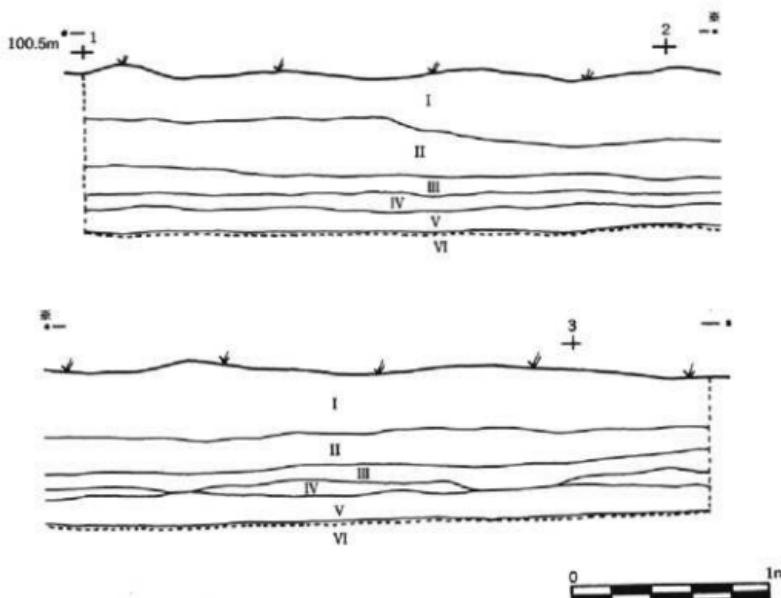
第II層：暗褐色粘土質シルト（炭化物を含む）

第III層：黒褐色粘土質シルト（炭化物と赤色の粒子を含む。かたくしまっている）

第IV層：暗茶褐色粘土質シルト（かたくしまっている）

第V層：黒褐色粘土質シルト（若干の炭化物を含む）

第VI層：明褐色砂質シルト



第3図 C 遺跡北壁層位断面図

V D 遺跡の調査

1 調査区の概要

前回の調査区からは多量の土器や木製品、植物遺存体が出土した大溝S D 1 や、堅穴住居跡2軒、井戸跡1基、組み合わせ不明の柱穴群等が検出されたが、平安時代の主要遺構はさらに北側に存在すると予測していた（渋谷1984）。今回の調査区は大溝S D 1 の北方約30mに位置することから、大溝S D 1 が機能している時期の遺構の存在が期待された。

調査対象区は8m×20cm四方で、北西隅の用地杭を基準として3×3mのグリッドを設定した。グリッド軸は真北から49°05'東に傾いている。地目は水田である。

2 層 序（第4図）

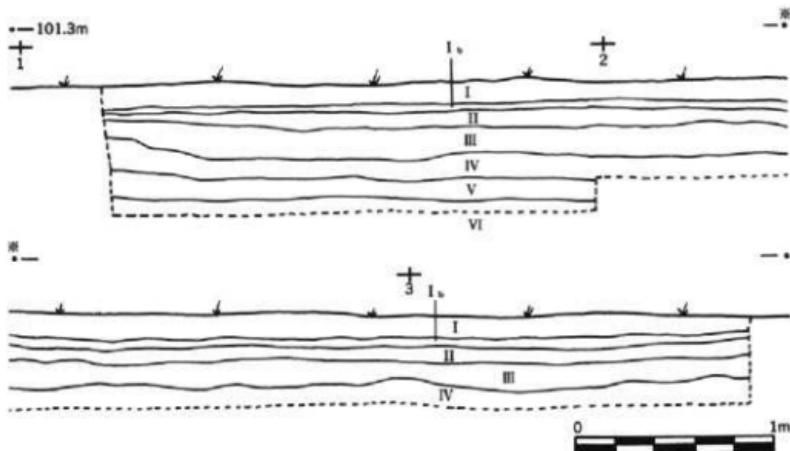
今回の調査区の層序は以下に示すとおりである。なお、今回の平安遺構の地山であるII層は前回のIV層に相当するものと考えられ、弥生時代の包含層である前回のIII層は当地区には存在しないと判断される。

第I_a層：暗褐色粘土（現在の水田の耕作土）

第I_b層：暗青灰色粗砂混り粘土（現水田の床土）

第II層：褐色砂質シルト（大粒の炭化物を若干含む。平安時代の遺構の地山で、昭和35年の耕地整理の際大幅に削平を受けている）

第III層：暗褐色シルト質粘土（炭化物を若干含む。しまっているがやわらかい）



第4図 D 遺跡東壁断面図

- 第IV層：灰褐色粘土質シルト（粗砂を含み、よくしまっている）
第V層：黒褐色粘土（強粘土で鉄分が付着。しまっておりかたい）
第VI層：灰褐色シルト質粘土（色調はIV層とほぼ同じ）

3 発見された遺構（第5図）

1号掘立柱建物跡

II層上面で検出された南北3間以上、東西2間以上の建物である。当初設定した調査区内で、ほぼ南北に連なる3基の掘り方を検出し、掘立柱建物跡になる可能性が生じたため、その規模を確認する目的で、一部は調査対象外となるが、2ヶ所の試掘溝を設定してII層上面まで掘り下げた。その結果、予想どおり、掘り方の存在が確認され、調査区内の3基の掘り方は建物の東面柱列となることが決定した。恐らく南北棟であり、その主軸は真北から東へ4°の振れをもっている。

アタリの芯々ではかった柱間距離はEB1・2間が2.30m、EB2・3間が2.05m、EB1・5間が2.35mとなり、アタリの不明確なEB4の中心からEB3の芯々までは2.40mをはかる。

掘り方の大きさ、アタリの直径は以下に示すとおりである。EB1—掘り方は南北78cm東西63cmの長方形で、中央やや東寄りに直径30cmの柱痕跡であるアタリが認められる。EB2—南北62cm、東西69cmの隅丸方形で、中央北東寄りに直径28cmのアタリが認められる。EB3—南北60cm、東西61cmの隅丸方形で、ほぼ中央に直径20cmのアタリが認められる。EB4—南北59cm、東西58cmの隅丸方形であるが、地区外となるため一部を掘り下げただけでアタリは検出できなかった。EB5—南北50cm、東西65cmの隅丸長方形で東寄りに直径22cmのアタリが認められる。

掘り方の底面までの深さは、断ち割りを行ったEB1～3で25～30cmと浅く、平安時代以降に相当の削平を受けているものと考えられる。

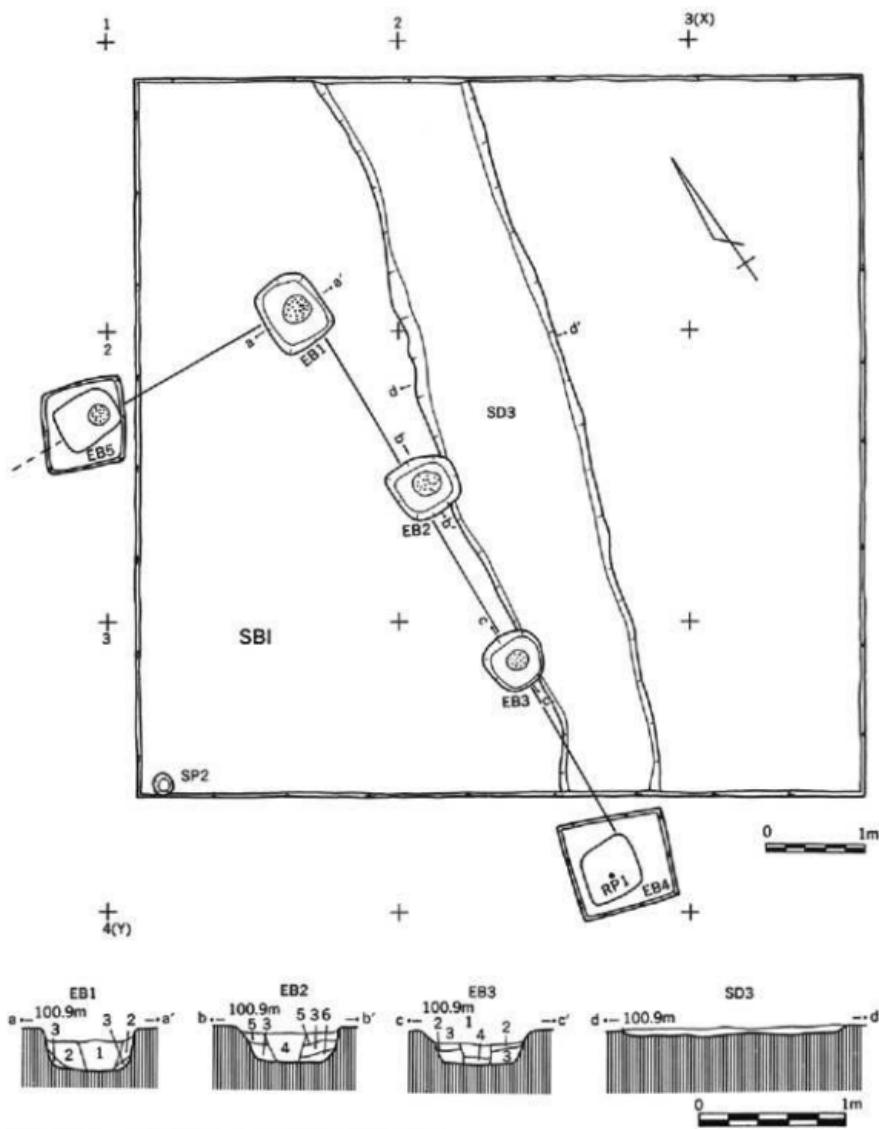
EB1～3からは遺物の出土がなかったが、EB4からは次節で述べる土師器の甕1個体と須恵器の甕の破片、それに、赤焼土器坏類の口縁部破片が出土した。

2号ビット

調査区の南西隅のII層上面で検出された小ビットである。径21cmで、確認面からの深さは12cmをはかる。堆積土は黒褐色砂質シルトの単一層である。遺物の出土はない。

3号溝跡

調査区のほぼ中央を南北に走る幅90～150cm、深さ6cm前後の浅い溝で、堆積土から近世以降の陶器片が出土しており、水田の盤下げによるものと考えられる。



SB1 EB1~3

- 1: 黒褐色シルト (酸化鉄の付着があり、部分的に赤っぽい)
- 2: 黒褐色粗砂泥リシリト質細砂 (底面に酸化鉄が付着する。かたくしまっている)
- 3: 増青灰色シルト質粘土 (2のブロックを斑状に含む。かたくしまっている)
- 4: 板増青灰色シルト質細砂 (酸化鉄が付着する)
- 5: 黑褐色シルト質細砂 (粗砂を多量含む)
- 6: 黑褐色シルト質粘土 (青灰色粘土のブロックを含む)

SD3

- 1: 増青色砂質シルト (褐色粘土ブロック、増青灰色粘土ブロックを含む)

第5図 D遺跡発見造構平面・断面図

4 出土した遺物

1) 1号掘立柱建物跡出土の遺物（第6図）

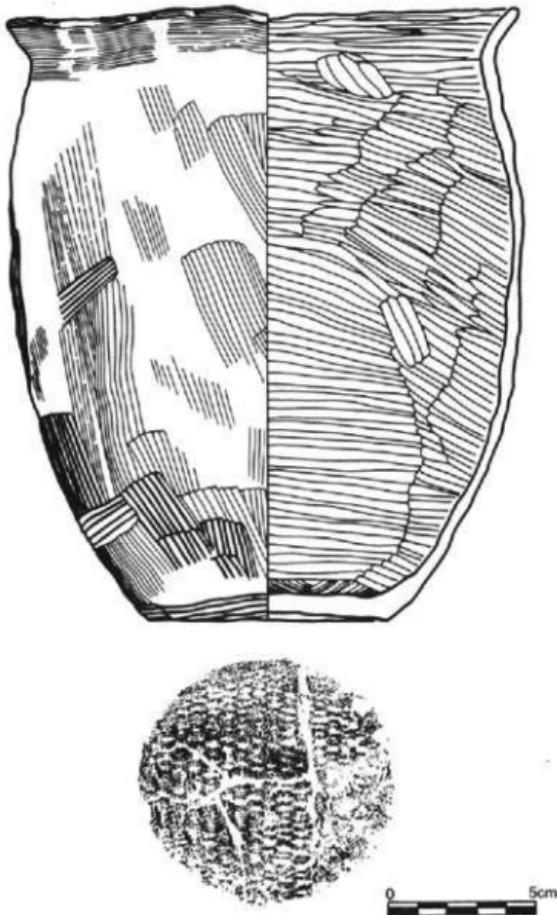
E B 4 から第6図に示した土師器の壺1個体と、須恵器壺の肩部の破片、赤焼土器壺の口縁部破片2点が出土した。

土師器壺は平均口径が17.5cm、平均器高20.8cmで、口径と体部の最大径はほぼ一致する。成・整形にあって、ロクロは使われていない。口縁部は単純に「く」の字状に短かく外反し、体部中央がややふくらみをもつ。

口縁部外面には指頭によるヨコナデが施されている。外面は風化が著しく、特に上半部は調整痕が消えてしまつた部分も多いが、全面に刷毛目調整が施されていたと考えられる。刷毛目調整は縦方向に口縁部から体部下半に向う方向で施され、最終的に体部下端と、体部中央に部分的に横方向の彫りの深い刷毛目が施されている。

内面は横方向の間隔が広く、彫りの深い刷毛目が全面に施されている。

底部外面には薄にしては横糸の間隔が狭すぎるが、恐らく藁を網んだとみられる敷物の圧痕が認められる。



第6図 D遺跡出土器実測図

2) I 層出土の遺物

水田耕作土の I_a層と床土の I_b層から磨滅の著しい土器片と剝片が出土している。その内訳を示すと、土師器壺が 1 片、甕が 2 片、須恵器壺が 1 片、甕が 1 片、赤焼土器壺類の破片が 6 片、そして、文様、地文とも明らかではないが、胎土の特徴から判断して、弥生土器片とみられるものが 2 片、剝片が 1 点である。いずれも図示できるようなものではなかった。

VI まとめ

今回の発掘調査は、東北電力株式会社の送電線鉄塔移設に係る緊急発掘調査であるが、新たに次のような成果が付け加えられることになる。

- 1 境田 C 遺跡は前回調査した A・B両地区を結ぶ線の北側に遺構が分布する可能性はほとんどなく、遺跡の北限が捉えられたこと。
- 2 境田 D 遺跡は今回の調査区より、さらに北側に広がっている可能性が高く、前回調査した大溝 S D 1 は、平安時代の遺構群では南限に近い位置となること。
- 3 全体像を捉えることはできなかったが、今回 D 遺跡で検出された掘立柱建物跡は、豊富な遺物が残された大溝 S D 1 と有機的な関連をもつことは確実で、建物の規模も時期的にはやや遅ると考えられる C 遺跡 B 地区の母屋と考えた S B 101 を上回り、堅穴住居跡も発見されているとは言え、D 遺跡の主要な住居遺構も、やはり掘立柱建物であった可能性が強かったことは、堅穴→掘立柱という住居様式の変遷を探るうえで貴重な資料をもたらしたと言えるであろう。

参考・引用文献

- 石川七郎 (1962) : 「弥生式土器を出土した山形市七浦遺跡」 『東北考古学』 第3輯 pp59~63
山形理・米地文夫 (1967) : 「考古資料と地形・地質との関係—山形県の例について—」 『山形県の考古と歴史』 pp3~11
柏倉亮吉・武田好吉・加藤 稔・山口和夫 (1968) : 「山形市史・別巻Ⅰ」 山形市
加藤 稔 (1973) : 「弥生文化」 『山形市史 上巻』 pp212~280 山形市
米地文夫 (1973) : 「第一章 山形の自然とおいたち 第1節 2 地形と地質 3 気候と水系」 『山形市史上巻』 pp19~72 山形市
佐藤庄一 (1977) : 「分布調査報告書(4)一東北横断自動車道西田線関係」 山形県埋蔵文化財調査報告書第12集
渋谷孝雄 (1982) : 「境田 C 遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第62集
渋谷孝雄他 (1984) : 「境田 C'・D 遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第67集
長橋至他 (1985) : 「お花山古墳群発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第85集

図 版



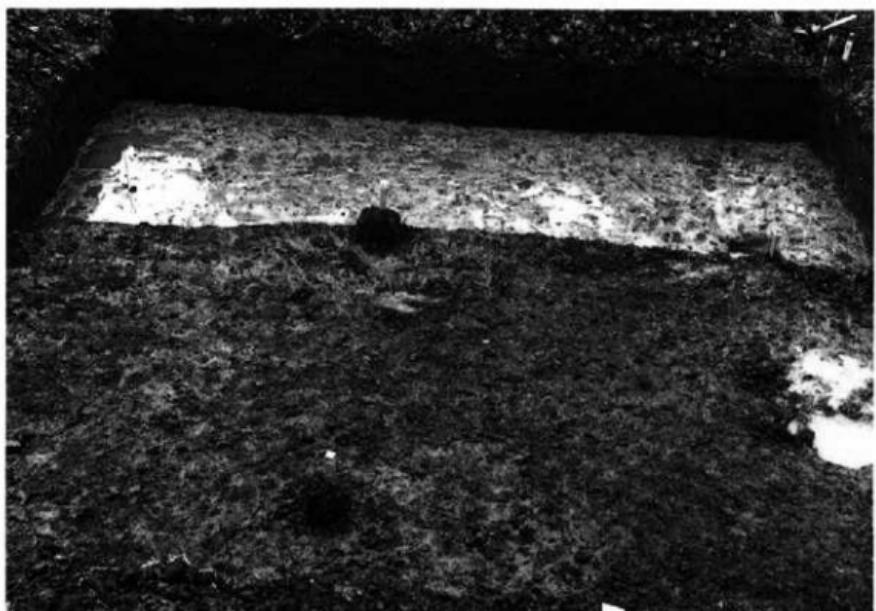
C 遺跡調査区近景



C 遺跡調査風景



C 遺跡北壁層位断面



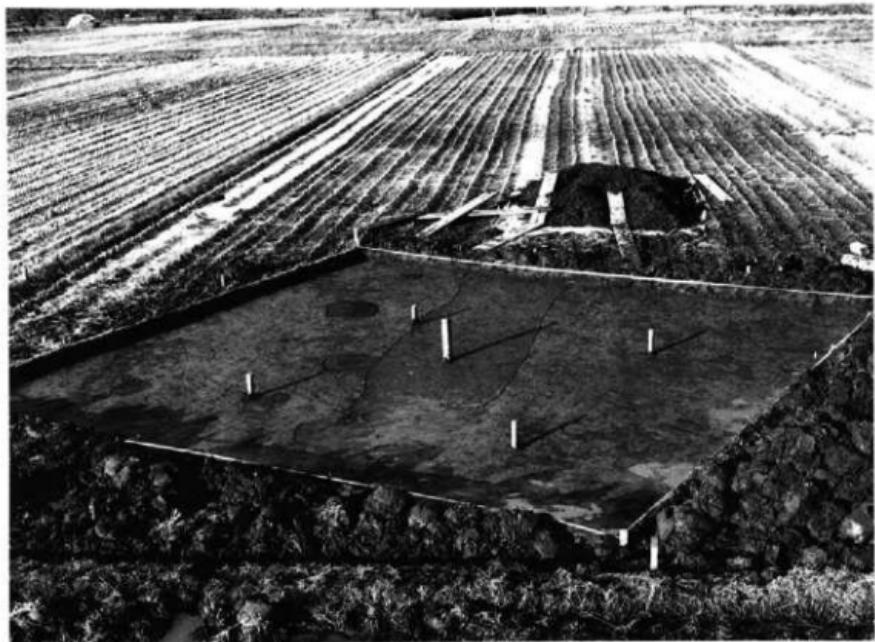
C 遺跡調査区全景



D 遺跡調査区近景



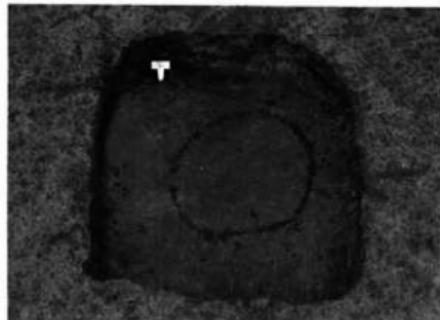
D 遺跡東壁層位断面



D 遺跡遺構確認状況



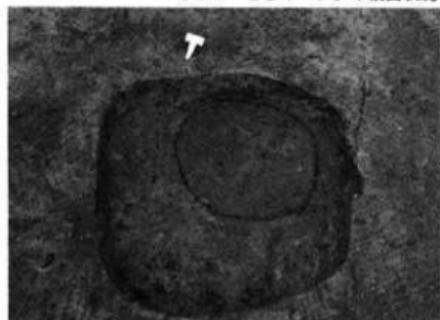
D 遺跡調査区全景



SBI EBI アタリ検出状況



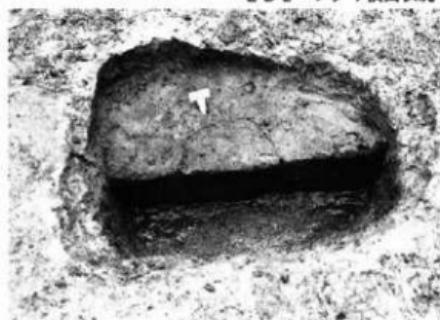
EB1 層位断面



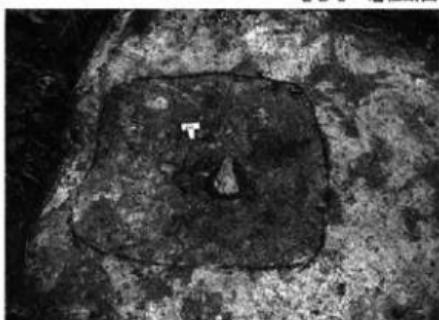
EB2 アタリ検出状況



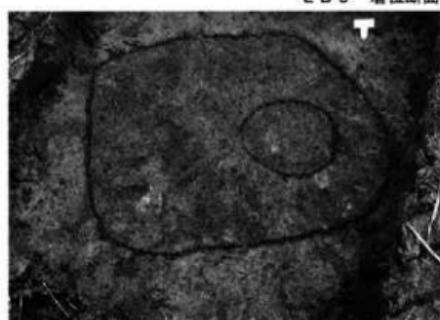
EB2 層位断面



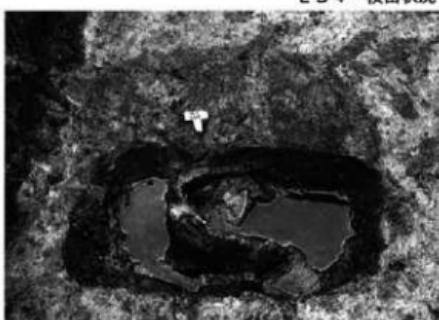
EB3 層位断面



EB4 検出状況



EB5 掘り方・アタリ検出状況



EB4 土師器甕出土状況



S B 1 E B 4 出土土器壁(2/3)

山形県埋蔵文化財調査報告書第105集

さかいだ
境田C・D遺跡

発掘調査報告書

昭和61年3月20日 印刷
昭和61年3月25日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 レ大風印刷
